

宮尾登美子

仁淀川

に

よど

がわ

新潮社

仁淀川 に よ ど が わ

宮尾登美子

新潮社



仁淀川
に よど がわ

発行 二〇〇〇年十二月二〇日

二刷 二〇〇一年一月二五日

著者 みやお とみこ
宮尾登美子

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二―八七一
東京都新宿区矢来町七一番地

電話編集部(03)三三六六―五四一一
読者係(03)三三六六―五一一一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Tomiko Miyao 2000, Printed in Japan

ISBN4-10-368503-4 C0093

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

仁
淀
川
・
目
次

第一章 故郷の山河

7

第二章 喜和との再会

46

第三章 移りゆく世相のなかで

84

第四章 町から来た嫁

122

第五章 結核の宣告

161

第六章 両親の和解

200

第七章 新客来訪

239

第八章 綾子自立へ

278

装幀 新潮社装幀室

仁
淀
川

第一章 故郷の山河

秋の陽ざし降りそそぐなか、目に沁みるほど鮮やかな緑の野菜がいちめんに拡がっている畑の道を歩いているとき、地響きにも似たその水音を綾子の耳は捉えた。

轟々とどろき、どうどうと響き、そして縷々^{るる}と絶えないその音を聞いた瞬間、綾子は思わず我を忘れて駆け出していた。畑の道から土手まではゆるい坂ながら、両手に荷を提げ、美耶をおぶった身ではすぐぜいぜいと息切れするのもかまわず、一気に登り切ったその眼下には、豊かな仁淀川^{にようがわ}の水をここで仕切った八田堰の、一年半まえとすこしも変らぬままの姿があった。

堰は、こちらの岸から、人の形が豆粒ほどに見える向う岸まで、地鳴りをあげて水を下流に落しており、その直線の横列はまるで一枚のガラス板のように光って見える。午後の陽ざしはおだやかだが、奔騰する水は荒々しいほどの勢いで四方八方に碎け散り、その飛沫^{しぶき}はこここに小さな虹を作っている。豊かな水は川上から絶えまなく無尽蔵に來り、この堰で遊んではまたはるかな下流へと分散してゆく。

何という清らかな水、何という豊富な水量、綾子は呆然と土手に突っ立ったまま、長い時間、仁淀川の姿に目を注ぎ続けた。昨年三月末、満州へと旅立つ朝、この土手を今日とは逆に伊野駅へと向う途中、たしかにこの堰にも目をとめたはずなのに、川はいま、綾子にとって生まれて初めて出会ったような、この上ない清冽無垢な姿に見えた。

考えてみれば、出発の日からつい五日まえの、葫蘆島ころうから引揚船に乗り込む日までの一年半、綾子は一度も、このように澄んで美しい水に出会ったことはなかったと思った。

出発は終戦の年の昭和二十年、空襲のなかをかいぐぐって、小学校教師の要とともに渡満した綾子だったが、暮し始めてみて何よりも悲しかったのは水の悪さであった。

大陸でも大都市は水道が完備されていたが、任地の開拓団入植地では水は全部露天井戸を掘って使い、汲み上げると赤土を溶いたようなどろりとした水が上ってくる。

十分に煮沸して飲んでも、これでは一人の例外もなくアミーバ赤痢にやられ、無医地区では薬もないまま、何とかやりすごしているうち水に馴れ、ようやく大陸向きの体ができ上ってくるという経験を、綾子も通ってきている。

こんな濁った水でも、せめて豊かに地下から湧いてくれば洗濯でもできるのだけれど、雨の少ない大陸では、少し気張って使えば井戸はすぐ干上がるし、住居の近くの飲馬河も、怒れば洪水となるものの、常時はからからの涸れ河川なのであった。

ましてや終戦直後から家族三人収容されていた難民収容所では水は最高の貴重品、難民の分際で自由に使える道理もなく、綾子は今日まで、ろくに口をすすいだことなく、風呂も一年以

上入ったこともない。冷たく透きとおった水など、もはや望んでも得られぬもの、と生活感覚から遠く遊離していた綾子に、この豊饒な景観と水音は鮮烈であった。

ここは正しく水のきれいな日本、日本のなかの高知県、高知県の吾川郡、吾川郡の仁淀川の岸にいま、あたしはいる、といく度もひとつひとつ自分に向っていい、その言葉がまるで酒の酔いのように体のすみずみまでをめぐったとき、綾子はいい知れぬほどの安堵をおぼえた。

引揚船が佐世保港に着き、一年半ぶりに日本の山々を見たときも涙が滝のように落ちたし、さきほど、伊野駅で下りたとき、駅舎のまわりにコスモスの咲いているのを見ても胸が熱くなつたけれど、それにも増してこの千年変らぬ清い水の流れば綾子に大きな安定感を与えてくれたと思つた。

終戦から引揚げまでの一年間、大陸の情勢はめまぐるしく変り、収容所のあった營城子炭坑の倉庫から社宅へのすしづめの割当て、そのあと九台かまぼこ兵舎から新京（長春）の収容所へと、デマにおびえながら移動させられ、そのたび、明日はどこへ追い立てられるか、行き先は安全か、食糧は支給してもらえるか、不安にふるえていたことを思えば、ここはようやくくにして辿りついた終着点なのであった。

この八田堰は藩政時代、山内家の家老野中兼山が吾川郡一帯の灌漑のために建設したもので、仁淀川の堰ももう一ヶ所ある。

要の家の前を流れる川も八田堰から分水したもので、いま綾子が立っている土手からはゆるい坂の行当峠を直角に曲れば、もうそこは桑島村上であつた。

いつまでも川を眺めている綾子を要が促し、背中の美耶と三人、ゆっくりと歩き出したが、その風体はたまさかすれ違ふひとたちが振返つては立つて眺めるほどの印象であつたらしい。さきほど汽車から下りたあと、引揚事務手続きのため、三人は駅舎の隣の地方事務所に寄つたが、そのとき誰かが、

「や、汚い。乞食が来た」

といったのを綾子は耳に止めているし、手続きのあいだ中、ドアのあいだから女子職員たちの顔が打重なつてこちらを覗いていたのもおぼえている。

それに事務担当者は、偶然要の小学校の同級生だったが、彼は級友との久し振りの邂逅にも多くの言葉を発せず、ただ固い唾を飲み込み込み込みしながら、書類を作っていたのも目にとどめている。

このとき綾子と美耶は、新京で東亜樓の女将から恵まれた端切れでかろうじてもんぺという衣服を身につけてはいるが、要は、綾子がゴミ箱から拾ってきた麻袋で縫つた半ズボンをはいており、三人ともその衣服は着たきり故に汚れに汚れ、その上、一年以上も顔も体も洗つたこともないために、自分では判らないが、たぶんかなりの異臭を放つていたものとみえる。

また栄養失調の果ては皮膚病にあらわれるといわれるとおり、三人とも、搔いても搔いてもかゆみのとまらぬ疥癬かいせんにも全身おおわれており、誰が見ても、檻樓ぼろと瘡蓋かさぶたにまみれた乞食以外の何者でもないことは綾子もよく判っている。

飲馬河の住居で暴民に襲われ、文字通りの無一物で逃れてから一年、その間、どれだけ多く

の人たちから最低の難民、乞食以下、と指差されてきたか、しかしそれは正しく事実であったし、抗弁する気持もないままに過してきた月日であった。

いま、地方事務所や、道で行き交う人々の好奇と蔑みのまなざしに会って、もはや綾子は何とも思わなかった。馴れるとはおそろしいもので、これ以下はないところまで落ちてみれば、いつそ気は楽になり、ひそひそ声もどこ吹く風、とうそぶいていられるようになる。その居直りの底には、こうなったのも自分の不心得じゃないよ、戦争のせいよ、といいたくなる気持もないではないけれど、それは同じ境遇の人間ばかり集った引揚船限りのこと、上陸し、こうして平和を取戻した故郷に戻れば、綾子はともかく要は多少なりとも人の視線が気になるらしく、さつきよりはいくらか急ぎ足になってくる。

分水の地行当の水門からは桑島上、中、下三村までずっとまっすぐな一本道、流れに沿って下ってゆくと綾子には見おぼえのある家々、田畑、道のわきの梅檀せんだんの木、片側の流れにかかっている古びた一本橋などつぎつぎに過ぎ、そしてここで少しカーブしている三好家の笹竹の垣と、家の隅の肉桂の木が見えて来た。

秋の陽はあまねく照り、時刻は午後三時ごろとおぼしく、綾子は門に入るまえ、

「お母さん、いまごろ家におるかしらん」

と呟くと、要も足をとめて、

「祖父さんだけじゃないかねえ。たぶん」

と、ついその外出先から戻ったように気軽くい、それから綾子と並んで門の前に立ち、

ちよつとの間、一年半留守にしていた家を眺めた。

コンクリートの門柱ふたつ、笹垣の内側左は便所と風呂があり、右側には倉、正面梅と紅葉の植込みの奥の坪庭をへだてた蘂葺きの母家はかわりなく、左手納屋とその向うの釜屋も、当然ながら二人の出発前とは何の変化もなかった。

家のうちはしん、としており、門に続く飛石を渡つてもう一度坪庭を見渡したとき、陽の当る縁側で杖をかたえに、祖父が日向ぼっこをしているのを綾子が見つけ、

「お祖父さん」

と駆け寄った。

祖父は驚いて見えぬ目を見張り、

「誰ぞ？　姉ねえか？」

と確かめ、要がそれに、

「祖父さん、戻もんたよ」

というと、さもほっとしたように、

「そうか、そうか、二人とも戻もんたか。

子はどうした？」

としわ手を宙に這わせるのへ、綾子は美耶をゆすり上げて傾け、その手に小さな手を触らせながら、

「美耶も元気で戻り着きました」

という、今年八十三歳は耳だけはまだしっかりしていて、少しむずかる声のほうに顔を向け、いかにも嬉しそうに、

「そうか、そうか、子も戻んたか。三人揃うて戻んたか」
を繰返している。

そのうち、

「おつ母がどれほど案じよったか。一時は三人とも死んだもんとあきらめちよったきにのう」と義歯の具合の悪そうな口ぶりでそう伝えた。

綾子は、内地の肉親は皆、自分たちがとうに死んだであろうと考えているのを予想していたし、無事生還したからにはその言葉はもう過去の話、として聞き流してしまっただが、祖父は自身不安と憂慮を、嫁のいちの心情に託して明かしたものであったろう。

そして旅装を解くために皆釜屋に入り、以前どおり寸分も変わっていない土間のたたずまいの、一隅の畳の上に美耶をおろした。汚ないリュックと、襪履同然のものしか入っていない風呂敷包みなど土間に拡げているとき、納屋の入口でバタバタと気配があったと思うと釜屋の腰高障子ががらりと開いて、弾んだ声の、

「よう戻んたねえ」

と満面笑顔の姑のいちであつた。

このとき要が挨拶したかどうか、綾子はおぼえていないが、嫁としては、
「お母さん、ただいま戻りました」

と頭を下げると同時に、

「美耶です」

と、坐っている子を押出した。

全身瘡蓋だらけの美耶は、このとき栄養不足で弱り切っており、瘦せた足を投げ出してかうじて体を支えている様子だったが、いちは目を輝かせ、飛びつくようにして手をさしのべ、「おお、おお、美耶ちゃんか、美耶ちゃんか。大きゅうなったこと。」

さあ、おいでおいで」

と抱こうとしたところ、美耶は世にもつらそうな表情を浮べ、「あーあー」と消え入りそうに力ない声をあげて泣き出した。

それは赤ん坊の人見知り癖などではなく、綾子にだけはよく判る、おびえ切ったいかにも悲しそうな泣き声であった。

いちは、ひよっとすると我が子の要よりも孫の美耶を見たさに今日の日を待っていたであろうと思われるだけに、美耶のこの嫌がりようは姑に申しわけなく、綾子は、

「美耶ちゃん、ほらおばあちゃんよ。美耶ちゃんを待ちよってくれたのよ。ほら、『ただいま』いうて」

となお美耶を押しやろうとしたが、美耶は母親にしがみついて拒否するほどの力はないまま、弱々しい声と大粒の涙をこぼしながら泣くだけであった。

このとき、一瞬ではあっても気まずい空気が流れたのを綾子は感じ取っていたが、さすがに